

『伊勢物語』の成立と『万葉集』：
卷十六左注との関係を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仁平, 道明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009345

『伊勢物語』の成立と『万葉集』

——卷十六左注との関係を中心に——

仁 平 道 明

『伊勢物語』における『万葉集』歌の存在が『伊勢物語』の創作性を証するものであることは、はやく旧注に指摘がある。たとえば、『伊勢物語』を「畢竟作物語と見侍べきなり」と規定する『伊勢物語肖聞抄』^{注1}は、「此

歌万葉にあり。是又作事也」(第十四段)「此歌は、万葉に、谷せばみ(中略)といへる歌をすこしかへてかけり。(中略)是も作物語の段也」(第三十六段)と注している。旧注以前の、『和歌知願集』における「この物語は業平の事にはあらず。はるかにふるきよのものがたりを、これにかきまじへたる也。この歌どもは、万葉集におほく、よみ人しらずにていりたり」(第二十三段)

「これは万葉の歌にてあるを、業平のあづまより京なる人のもとにやりたるやうに、人にみせんとて、かくかけり」(第百十六段)という見方から一步ふみ出し、『伊勢物語抄』の「此歌は、万葉の七巻歌。それを二条の後

は詠じ給物也」(第十四段)「業平何となきやうにて、万葉の古歌を詠ず」(第三十三段)とする『伊勢物語』実録説の迷妄を脱した卓見であったといえよう。

だが、『伊勢物語』と『万葉集』との関係は、歌については、「伊勢物語中に存する十二首の歌も、万葉集より直接選択されたものではなく、万葉の歌が修正され、改作され、古歌として存在したものであったかも知れない」^{注2}という可能性を考える見方もないわけではなく、歌のみによって^{注3}は確定しがたいということもあって、その後も繰り返し問題にされながら、決定的な結論をみていないように思われる。

小稿では、『伊勢物語』の創作性を考えるために、その前提のひとつとなる『万葉集』との関係について、歌をはなれて、卷十六の左注との関係を検討することによって、一応の結論を出してみたいと思う。

『伊勢物語』と『万葉集』巻十六の關係については、森本治吉氏が、

万葉集第十六巻が、物語文学の萌芽である事は、既に説き古されてゐる。(中略)後世への系統を考へると、第一の神仙説話(竹取翁の歌)は、竹取物語及び宇津保の俊蔭の巻等に、第二の伝説的のもの(妻争の歌)は大和物語等へ、最後の描写的のものが伊勢あたりへ、夫々伝はつてゐる。^{注4}

とし、また窪田空穂氏も、

伊勢物語の作者の眼前には又、今日われわれがいふところの歌物語があつた。これが作者に或暗示を与へたらうと思はれる。(中略)万葉集十六巻には竹取翁と七人の仙女との問答の歌がある。(中略)又、一人の女を二人の男が争つた桜児、縵児などの歌がある。何れも左注に、「古者」と書き出して、その歌の背景としての伝説を伝へてゐる。その扱ひ方は、大体の上から見ると伊勢物語に酷似してゐる。ただ歌のみを連ぬることによつて、或は歌と歌のあひだに、短い繋ぎの文を加へることによつて、或は又一聯の歌に左注を添へることによつて、一つの事件を

髣髴させてゐるものが、その数は少いが伊勢物語の作者の眼前にあつた。^{注5}

としてゐるように、従来、間接、直接の影響が考えられてきた。また、具体的に、どの部分がどのように「暗示を与へた」のか、『伊勢物語』のなかにどのようにとり入れられてゐるのかという点については、新井無二郎氏に、部分的にはあるが、説がある。

新井氏は、『評釈伊勢物語大成』において、『伊勢物語』第四十五段について、「万葉集十六ノ巻に、この物語に類似のことが見えてゐる」ことを指摘し、巻十六の「恋夫君歌」(三八一一・三八一二・三八一三)の左注を引き、「恐らくは、この段はこれに本づいて作つたのであらう」としている。^{注6}(なお、第四十五段と「恋夫君歌」の類似については、契沖の『勢語臆断』に指摘があるが、「此たぐひ也」とするのみであつた。)

たしかに、次に掲げるように、その二つの話は類似している。

むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にもいはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来たりけ

れど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。蛩たかく飛びあがる。この男、見ふせりて、

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのことなくものぞ悲しき

（『伊勢物語』第四十五段^{注7}）

右、伝云、時有娘子、姓車持氏也。其夫久逕年序、不作往来。于時娘子、係恋傷心、沈臥痼疾。瘦羸日異、忽臨泉路。於是遣使、喚其夫君来。而乃歔歔流涕、口号斯歌、登時逝歿也。

（卷十六「恋夫君歌」左注^{注8}）

むすめは男（夫）を恋い、病に沈む。むすめが死に瀕した時、知らせを受けて男は来るが、むすめは死んでしまふ。話の共通する骨組みを取り出してみると、およそこのようなことになろうか。

『伊勢物語』の歌と、掲出を略した『万葉集』三八一・三八二・三八三の歌との間には、類似点といえるほどのものは見いだされないが、二つの話はよく似て

いる。とはいえ、この一例のみでは決定的なとも言いがたく、そのこともあってであろうか、管見に入ったところでは、その後、抛るべき説として新井氏の指摘を引く論をみない。

だが、やはり、第四十五段は卷十六「恋夫君歌」の左注に「本づいて作つた」と考えるべきであろう。以下述べるように、『伊勢物語』が『万葉集』卷十六の左注等によって話を創作していることは、疑いを容れない。

二

「万葉集十六ノ巻に」「類似のことが見えてゐる」のは、第四十五段だけではない。

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書きて、うはがきに、「むさしあぶみ」と書きて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より、女、

武蔵あぶみさすがに掛けて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵あぶみかかるをりにや人は死ぬらむ

〔『伊勢物語』第十三段〕

右、伝云、昔有娘子也、相別其夫、望恋経年。尔時夫君更取他妻、正身不来、徒贈褻物。因此、娘子作此恨歌、還酬之也。

（卷十六・三八一〇左注）

右に引いた『伊勢物語』第十三段の話と卷十六の三八一〇番歌（「味飯を水に醸みなし吾が待ちしかひはさねなし直にしあらねば」）左注もまた、一読、「類似のこと」であるのは明らかであろう。

「京なる女」は、「其夫」ともいうべき武蔵に下った「武蔵なる男」と、「相別」れていたことになる。その男は「武蔵逢ふ身」となったことを女に言いおくる。男（「夫君」）は、「更取他妻」ことになったのである。男が送った、「上書き」に「むさしあぶみ」と書かれた手紙が、つつみ（「褻」）になっていたことはいうまでもない。女の「武蔵あぶみさすがに掛けて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし」という歌は、男の歌に「問へばいふ問はねば恨む」とあるとおり、「恨歌」にはほかならない。

このように、第十三段も、卷十六の左注と類似した話になっている。

なお、注目すべきことに、その三八一〇番歌左注は、新井氏によって『伊勢物語』との関係が考えられている「恋夫君歌」（三八一一・三八二一・三八二三）の直前にある。近接した場所にある二つの左注が、ともに『伊勢物語』の話と類似した内容をもっている。となれば、その類似は単なる偶然とは見なしがたいのではないか。

三

近接した場所といえば、三八一〇番歌左注とそれに続く「恋夫君歌」の前後、しかもごく近いところに、『伊勢物語』の話と類似した点のある、いくつかの左注が、ほかにも存在する。

まず、「恋夫君歌」左注の直後、三八一四・三八一五番歌左注をみよう。そこに語られていることは、次に示すように、『伊勢物語』第二十四段前半の話と重なり合うものがある。

右、伝云、時^{注10}有娘子、夫君見棄、改適他氏也。于時或有壮士、不知改適、此歌贈遺、請^{注10}詔於女之父母者。於是父母之意、壮士未聞委曲之旨、乃作彼歌報送、以顯改適之縁。

（卷十六・三八一四、三八一五左注）

むかし、男、かたゐなかにすみけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきけるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」とちぎりたりけるに、この男來たりけり。「この戸あけたまへ」とたたきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ　　△以下略▽

『伊勢物語』第二十四段

女が夫に棄てられ、他の男と再婚した。再婚を知らない、或る男が、夫に棄てられた女との結婚をその父母に申し込む。女の父母は、くわしい事情を知らない男に、歌を送って女の再婚を知らせる。——左注はこのようになことを語っている。その左注の話と、『伊勢物語』第二十四段前半の話は、次のようにひびきあう。

第二十四段の話でも、男の気持ちがどうであつたにもせよ、女は、実質的には「夫君見棄」という状態にあつた。「いとねむごろにいひたる人に、『今宵あはむ』とちぎりたりける」は、左注の「改適他氏」と重なる。そして、『今宵あはむ』とちぎりたりける」ことを知らない（「不知改適」）男（左注は別の「壮士」）に、女

（左注は「女之父母」）は、「ただ今宵こそ新枕すれ」と、歌を「よみていだし」（「作彼歌報送」）、「改適之縁」を「願」すのである。

『伊勢物語』第二十四段は、女の「あづさ弓引けど引かねどむかしより心は君によりにしものを」という歌が『万葉集』卷十二に類歌のあるものであることなど、以前から『万葉集』との関係が問題にされてきた段であつた。その類歌の問題はここではしばらく措くとしても、この第二十四段前半と三八一四・三八一五番歌左注の話は、前述の類似に加えて、「恋夫君歌」左注と第四十五段、三八一〇番歌左注と第十三段とのことがある以上、無関係とは考えがたいように思われる。

さて、三八一〇番歌の前にも、『伊勢物語』への影響の可能性が考えられる左注がある。次に引く、三八〇七番歌（「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」）左注がそれである。

右歌、伝云、葛城王遣于陸奥国之時、国司祇承、緩怠異甚。於時王意不悦、怒色顯面、雖設飲饌、不肯宴樂。於是有前采女、風流娘子、左手捧觴、右手持水、擊之王膝、而詠此歌。尔乃王意解悦、樂飲終日。

（卷十六・三八〇七左注）

この話は、よく知られるように、『古今和歌集』仮名序「安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて」の注にも、「葛城王をみちの奥へ遣はしたりけるに、国の司、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりてよめるなり。これにぞ王の心とけにける」と引かれている。その三八〇七番歌左注との関係が考えられるのは、左に引く『伊勢物語』第六十段である。

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にいきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりていだしたりけるに、さかななりける橘をとりて、

さつき待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする
といひけるにぞ思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける。

（『伊勢物語』第六十段）

三八〇七番歌左注でも『伊勢物語』第六十段でも、み

やこから地方に遣わされて下った貴人が、接待の宴席でこね、それをなだめるために、女がその前に出てさかづきをとるのである。（なお、この第六十段については、周知のように、朱買臣の話の影響の可能性が考えられているが、その朱買臣の話は、『漢書』第六十四上の朱買臣伝も『蒙求』の「買妻恥醜」も、このような設定をもたない。^{注12}）また、「祇承」という、記録の類は別として物語等には例を見いだしがたい語が、三八〇七番歌左注と第六十段に共通してみられることにも注目したい。

人間関係等の違いはあるものの、三八〇七番歌左注の話は、第六十段の設定にその影をおとしているとみるべきであろう。

四

これまで確認してきたことから明らかなように、『伊勢物語』は『万葉集』巻十六の左注によって話を創作している。『伊勢物語』第十三段、第二十四段、第四十五段、第六十段の設定が、それぞれ、『万葉集』巻十六の三八一〇番歌、三八一四・三八一五番歌、「恋夫君歌」（三八一一・三八一二・三八一三番）、三八〇七番歌の左注の設定と類似し、また、その左注が巻十六の近接した位置にかたまって存在していることからみて、そう考

えざるをえない。『伊勢物語』の作者は『万葉集』巻十六の左注を読んでいたものと思われる。

なお、『伊勢物語』の作者にとって、『万葉集』の左注は、読むのに苦労するようなものではなかったはずである。たとえば『新撰万葉集』序に、『万葉集』について、「文句錯乱、非詩非賦、字対難糅、難入難悟^{注13}」とするのも、歌の訓み難さを言うものであり、やや変格ではあっても漢文で書かれた題詞や左注のことではなかったと考えられる。前掲の左注程度のものならば、日常、漢詩文を読み、また属^{注14}っていたと思われる『伊勢物語』作者は、易々と読んだにちがいない。

『伊勢物語』と『万葉集』巻十六の左注との関係についての結論は以上のとおりであるが、このことはなお多くのことを示唆するように思われる。まず『伊勢物語』と『万葉集』の関係についていえば、左注のみにとどまらず、歌はもちろんのこととして、当然、作者が左注とともに目にしていたであろう題詞についても、検討が必要になってくるであろう。^{注15} また、左注とそれとをとりこんだ『伊勢物語』の比較によって、『伊勢物語』の志向するもの、あり方の一端をうかがうこともできよう。たとえば、第十三段・第四十五段・第六十段の場合、関連する左注が付せられた『万葉集』の歌がいずれも娘子・采女のものだけであるのに対して、『伊勢物語』の話が男

の歌を含むものになっていることは、「男」が歌を詠まない話を『伊勢物語』が六、七段しかもたないことの意味をあらためて考えさせるように思われる。また、さらには、『伊勢物語』の作者がだれなのかという問題についても、『万葉集』との関係がいくらかの手がかりを与えてくれるかも知れない。^{注16} そして、巻十六の左注との関係が示唆するもっとも重要なことは、『伊勢物語』という作品の性格であろう。『万葉集』の左注を素材として、程度の差はあってもそれぞれ一定の方向性をもつ創作を加えて成ったいくつかの章段が、たしかに存在する。それは、業平集あるいは業平歌をもとした小さな物語的なものが、そのときどきに浮遊する歌がたりを吸収しながら成長を続けて『伊勢物語』が成立したのではなく、さまざまな材料を持った「作者」というべきものの決定的な創作の手が加えられることによって、『伊勢物語』という作品がうみだされたということを示している。

『伊勢物語』の成立について考えるとき、『万葉集』が、『古今和歌集』とともに、重要な意味を持つものであることは、今更くりかえして言うまでもない。小稿では、その『万葉集』との関係を巻十六の左注を手がかりにして確定するにとどめ、そこから発展する問題の詳細な検討、類歌の問題等は、別稿にゆずることとしたい。

注1 片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（昭44・1）

所収のものによった。『和歌知頭集』（書陵部本）『伊勢物語抄』（冷泉家流）も同じ。

注2 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究（研究篇）』（昭9・5）。なお池田氏は、続けて、「然し我々

は、かかる媒介物としての古歌集を想像し得るにしても、現在それと指定出来るものを有してゐない。従つて今は単なる臆測を下すよりも、寧ろ仮に万葉集と伊勢物語とを直接結びつけて解釈する立場を取つておき、他日の研究を俟つ事にしたいと思ふ」としている。

注3 深町健一郎「伝承歌と歌語り——伊勢物語の成立基盤を求めて——」（『中古文学論攷』第二号、昭56・

11）も、「伊勢物語所載の万葉類歌は、特に民謡的なものが多く、古今集の歌も業平を別として読みしらずの歌がほとんどである。万葉集所載歌そのままのものは一首もないが、それは直接万葉集から採取されたのではなく、ひき続いて伝承されていた状態で取り入れられたためだと考えられる」とする。

注4 森本治吉「万葉集の性質とその文学史的意義に就て」（『国語と国文学』昭2・3）。

注5 窪田空穂「伊勢物語研究——伊勢物語とその作者——」（『日本文学講座 第十五卷』昭3・3）。

注6 新井無二郎『評釈伊勢物語大成』（昭6・11）。

同書がよった新釈本では、問題の段は四十四段。

注7 日本古典文学全集『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（『伊勢物語』は福井貞助校注訳。昭47・12）。以下、『伊勢物語』の本文の引用は同書による。ただし、一部、表記等を改めた。

注8 日本古典文学全集『万葉集 四』（小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注訳。昭50・10）。以下、『万葉集』の引用は同書による。これも、一部、表記を改めた箇所がある。

注9 河地修「伊勢物語成長論について」（『『東洋』第十六巻第七号、昭54・7）は、「歌物語の本来の性質を、万葉集、巻十六の題詞、或いは左注にある形などに求めることができるであろうと思う」とし、注して、題詞の例に三七八六・三七八七題詞を、左注の例としてこの三八一〇左注を引いている。

注10 三八一四「贈歌一首」は「白玉は緒絶えしにきと聞きし故にその緒また貫き我が玉にせむ」。三八一五「答歌一首」は「白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き人持ち去にけり」。

注11 雨海博洋『『伊勢物語』と源順』（『二松学舎大学人文論叢』第二〇輯、昭56・10）は「この段の作者が梓弓にまつわる伝承歌にヒントを得て物語化」し

たとする。

注12 たとえば、『漢書』卷六十四上の朱買臣伝では、

「朱買臣、字翁子、呉人也。家貧、好読書、不治産業。常艾薪樵、売以給食。担束薪、行且誦書。其妻亦負戴相随、数止買臣毋歌嘔道中、買臣愈益疾歌。妻羞之、求去。(中略)買臣不能留、即聴去。(中略)」

上梓買臣会稽太守。(中略)会稽聞太守且至、發民除道、県吏並送迎、車百余乘。入呉界、見其故妻、妻夫治道。買臣駐車、呼令後車載其夫妻、到太守舍、置園中、給食之。居一月、妻自經死。(以下略)」とする。

注13 『新撰万葉集』の引用は群書類従本による。

注14 『伊勢物語』第百七段に「かのあるじなる人、案をかきて、かかせてやりけり」とある、「案」という語などからも、その作者が、日常漢文を属する官人であった可能性が考えられよう。

注15 たとえば、問題の卷十六では、三五〇四番歌の、「昔者有壮士、新成婚礼也。未經幾時、忽為馭使、被遣遠境。公事有限、会期無日。於是娘子、感慟悽愴、沈臥疾疢。累年之後、壮士還来、覆命既了、乃詣相視、而娘子之姿容、疲羸甚異、言語哽咽、于時壮士、哀嘆流淚、裁歌口号」という題詞が、『伊勢物語』第六十段の「宮仕へいそがしく、心もまめな

らざりける」や第六十二段の「いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな」などにひびいている可能性も考えるべきかも知れない。

注16 梨壺の五人とその周辺、とりわけ紀時文の父貫之を作者に比定しうる可能性が、ますます大きくなってきたというべきであろう。貫之と『万葉集』との関係については、たとえば、中西進「古今集への道——貫之歌の源泉」(『解釈と鑑賞』昭54・2)が「貫之は『万葉集』を熟知していると、私は思う」とし、村瀬敏夫「紀時文考」(『湘南文学』第五・第六合併号、昭47・3)に、「時文を寄人とした場合のメリットとして、彼が受け継いだ貫之の蔵書を利用し得ることが指摘できよう。(中略)ことに貫之には『万葉集抄』五巻の著作があったということが八雲御抄(巻一)によって知られるが、これは万葉集の歌に訓点を施したものであることだから(清水浜臣『遊京漫録』下)、古点の作業に必須のものであったろう」としている。